

留学生におくる令和のころ (7)

一年のはじまり

令和 3 年 1 月

JaLSA 日本文化研究員

「松の内」とは家の中に神様がいるということ

読者の皆様、改めまして新年あけましておめでとうございます。今年もよろしく願いいたします。

皆さんも、このような新年の挨拶を受けたり、あるいは挨拶を習ったりしていると思います。「新年」には「明ける」という言葉を使います。これは「夜が明ける」ということと同じだからです。「これから明るくなる」という意味を込めて「明ける」という言い方をするのですが、それは「新しい年が、昨年よりももっとよく明るい年になる」ということを言っているのです。ですから、「明けまして」つまり「これから、あなたにとって明るい素晴らしい年が始まります。おめでとうございます」ということを短く言って「明けましておめでとうございます」という挨拶になるのです。普段の「おはようございます」や「こんにちは」とは全く異なり、新しい年が明けたときだけ、このような挨拶になるのです。

お正月には、このように「お正月特有の風習」が日本にはあります。そこで今回は、それを少しご紹介しましょう。

お正月のことを「松の内^{まつうち}」といいます。最近では少なくなりましたが、お正月にはどの家も門の所に「門松^{かどまつ}」を立てます。小さいものは松の枝をきれいに形にしているもの、大きいものでは竹を真ん中にして周辺に松をあしらったものなど、さまざまあります。愛知県の豊田市の一部、徳川家康の出身といわれる場所では、松明^{たいまつ}を燈すような風習の所もあります。これは、松がその年の年神^{としがみ}¹の依代^{よりしろ}であり、松がそこにある間は神様がその家にいるということを意味しています。「松の内」とは、この「門松が飾ってある間」という意味で「お正月の期間」のことを言います。大阪や京都では 15 日まで、ほかの地区では 7 日までとなっています。

¹ 年神：正月に家々に来て一年間の幸せをもたらす神。

この松の内を過ぎると、昔は「一歳歳^{とし}を重ねる」というような風習になっていました。そこで、京都の風習に合わせて、以前は、成人の日が1月15日になっていたのです。平成の法律改正で「第二月曜日」と変わってしまいましたが、成人の日はそのような意味があって、1月15日になっていたのです。大阪や京都以外の7日というのは、7日に「七草がゆ」を食べて一年の健康を祈る風習があります。そして健康になったので、まずは外に挨拶回りをすることになります。8日から14日までの間に、江戸などではその挨拶回りをする風習があったのです。これは、江戸時代初期、江戸の将軍も正月には京都の天皇に挨拶に行かなければなりません。江戸の中期以降は、将軍ではなく使者が行くようになりますが、逆に、江戸城にさまざまな大名が来ることとなります。そのために将軍や幕府や大名の重役が自分の場所を離れてしまう前に、挨拶をしなければなりません。京都や江戸から戻ってきてからは、正月ではなくなってしまうので挨拶としては遅くなりすぎです。そこで、京都と大阪以外では、少し早めに「松の内」を終わらせて早めに挨拶に行くということになっているのです。

そして1月15日には、もう一つ「小正月」というものがあります。これは、昔、まだ日本でも男性中心の社会であった時代、松の内は「男の社会の正月」か「一族全体の正月」ということとなります。自分の家にお客さんを招いたり、挨拶に行ったりというようなことになると、当然にお酒を出したり料理を出したりというように、家の中でさまざまなことをしなければなりません。一族の代表である男の人がお客様に対応するので、雑用は女性になってしまいます。そこで松の内は、女性が普段より忙しく休めない状態になってしまうのです。そこで、15日を過ぎて、男性が外に出て働くようになると、女性やその家の使用人が休みを取るようになります。その期間を「小正月」というのです。日本の人は家の中で立場が上の人も女性も、そして使用人まですべての人が神様の恩恵を受けることができます。しかし皆が同時に休みを取ってしまうと、仕事が回らなくなってしまうのです。そのために「小正月」のように時期をずらしてお正月の恩恵を受けるようになっていたのです。そこで緊急事態以外は、小正月にはあまり忙しくしない、家の人々にあまり用事を言いつけないということが、暗黙^{あんもく}の了解²になっていました。現代になって男女平等を言うようになってから、そのような風習がなくなってしまったのは非常に残念なことですね。

² 暗黙の了解：はっきり言葉に出さなくても皆がわかって受け入れていること。

おせち 御節料理でわかる「言葉を学ぶ意味」

さて、このほかにもお正月といえ、**「御節料理」**を食べるといふのがあります。

御節料理といふのは、現代のように冷蔵庫などがないう時代にできたもので、お祝いの料理ですぐに腐らないうな料理方法で調理されています。そのうえ、一つ一つの料理に、縁起が良いいわれ³があるのです。昔は、当然にお正月には店も閉まってしまいます。現在のようにコンビニがあるわけでもありませんので、何も買物ができません。現代でもそうですが、12月28日から1月5日までは、魚市場は年末年始の休業をしてしまいます。今年も1月5日の「初セリ」が話題になっていますが、それは3日までは魚を取る船が出ないため、4日に初荷、そして5日に初セリといふようになるのです。当然に5日の初セリのものがお店に並ぶのですから、それまでお店は開いていません。そのようなかでお祝いをしなければならぬのですから、さまざまな工夫がされていたのです。

この工夫には、一つには「腐らないうにする」といふことと、その料理を嫌がらないうに「お料理そのものに縁起の良いうストーリーをつける」といふことで、多くの人が喜んで御節料理を食べる工夫がなされていたのです。

例えば「海老」は煮物にしていますが、「腰が曲がるまで長生きできる」といふようなものであるとか、「ヤツガシラ」は「多くの人の頭に立って信頼される」といふような意味合があります。「黒豆」も、「まめに働けるように健康で達者に」といふような意味合がありますし、「栗きんとん」は漢字で書くと「栗金団」となり、金色の塊といふような感覚があります。もともとは「栗」は戦国時代なども、火がついて熱くなると跳ねることから、「勝ち栗」といわれ、勝負運が上がるとされていましたが、その栗が金色の団子になっているのですから「勝負に勝って金運が上がる」といわれていたのです。昔は、勝負事のある人や試験などがある年には、栗きんとんを少し多めに食べたようです。

このほかにも、「めでたい」といふことで「鯛」を食べたり「よろこぶ」といふことから「昆布」を食べたりといふようなところが御節料理になります。日本人は、「言霊」といって「言葉の中にも神様が宿る」と考えています。そのために、御節料理は、「言葉の中に含まれる良いう神様」を感じながら食べる食べ物といふことになります。逆に、正月

³ いわれ：物事が起こった理由。

に悪いことを言ったり、悪い話をしたり、というように「悪い言葉」を使うと、一年間良いことが起きず、悪い神ばかりが寄ってしまうと考えられているのです。

皆さんがいま学ばれている「言葉」というのは、単に人がコミュニケーションをとる道具ではなく、自分の中にいる神様を発して、周辺の人々や神々の心を動かすというものです。ですから、日本の文化の中には、「縁起を担いで言葉を変えた」例がたくさんあります。御節料理のことなどもすべて同じですが、これは正月だけではなく、普段から日本では「言霊」があると考えられています。ですが、正月は「松の内」という言葉があるように、神様が家の中に来ているので、いつも以上に言葉には気を付けなければならぬと思っています。

正月が終わると、普段の日常に戻ります。正月のことを「初春」とか「新春」というように言うのは、昔の^{こよみ}曆では、正月は一年を四つに分けたときの「春の初め」ということからそのように言っているのです。「春夏秋冬」という四季の中で、最も初めに来る春。これからさまざまな植物が芽を吹き、育ち始める一年の初めですので、新しい曆になって「新たな一年」というような意気込みで頑張るということを新たに思うのです。

さて、今年はどうな年になるのでしょうか。悪いことはすべて去年に置いておき、今年良いことばかりで始められるように、皆さんも一緒に頑張りましょう。